

瓦屋根に達した津波の痕跡が残る宮城県山元町の「震災遺構中浜小学校」で震災当時の校長、井上剛さんの話を聞く宮城野中の中学生記者

伝える 忘れないために

今できることプロジェクト

震災伝承新聞

発行　河北新報社営業局　2022.2.11

中学生記者 被災地駆ける

秀光中　岩沼 千年希望の丘へ 2
尚絅学院中　女川 いのちの石碑へ 3
宮城野中　山元 遺構の中浜小へ 4

東日本大震災の発生から間もなく11年。河北新報社の震災復興支援企画「今できることプロジェクト」では「次世代への伝承啓発」に力を入れ、震災伝承新聞を昨年に続いて制作しました。発災当時はまだ幼かった中学生に被災地を訪ねてもらい、あの日に何があったのかを学び、復興のいまを自分の目で確かめ、発信してもらう企画です。本特集は参加した秀光中学校、尚絅学院中学校、仙台市立宮城野中学校の3校の生徒28人が記者となって被災地を取材し、それぞれの視点で記事にまとめたレポートです。震災の記憶と教訓を、世代を超えて未来へ―。学校や家庭、職場でご一読いただき、伝承のバトンをつないでいただければ幸いです。



宮城県山元町磯浜漁港でホッキガイ漁再開までの歩みを取材する宮城野中のメンバー



宮城県女川町で１基目の「いのちの石碑」前で取材する尚絅学院中の中学生記者



岩沼市「千年希望の丘」で丘に込められた教訓を取材する秀光中の中学生記者

私たちも、復興のために「今できること」をともに考え、このプロジェクトを推進していきます。

河北　今できること　検索　facebookページもあります。

IHI Realize your dreams / Asahi / 岩手日日新聞社 / NTT DATA 株式会社NTTデータ東北 / ORIX オリックス 仙台支店 / KIRIN / ケーズデンキグループ デンコードー

劇団四季 / KBT 光輝ビルテクノス株式会社 / 乾杯を もっとおいしく。 SAPPORO / SUNTORY / JTB 感動のそばに、いつも。 / 信用と創造 住友不動産 / 一般社団法人 生命保険協会 宮城県協会

大和証券 Daiwa Securities / dic Color & Comfort DICグラフィックス株式会社 / 伝承千年の宿 佐勘 / HABLE 東急リバブル / TOSHIN 東伸環境株式会社 / NISHIKIYA KITCHEN

日本製紙株式会社 / 日本製紙クレシア株式会社 / あしたを、つなぐ ── 野村不動産グループ 野村不動産 / 東日本油化工業 株式会社 / HITACHI Inspire the Next 日立システムズ / 弁護士法人 平松剛法律事務所 Hiramatsu Go Law Office

FUJISAKI / FUJIFILM Value from Innovation 富士フイルム グローバル グラフィック システムズ株式会社 / みちのく企業グループ / 三井不動産 MITSUI FUDOSAN / 人を、想う力。街を、想う力。 三菱地所グループ / 三菱重工機械システム

一般社団法人 宮城県建設業協会 / 車検・点検はセーフティーステッカー運動実施中の会員工場へ 一般社団法人 宮城県自動車整備振興会 / みやぎ生協 / 明治安田生命 / RICOH imagine. change. リコージャパン株式会社 / Rethink PROJECT / 河北新報社

（順不同）

◎後援／宮城県、仙台市、石巻市、気仙沼市、岩沼市、東松島市、山元町、女川町、宮城県市長会、宮城県町村会、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会　◎協力／一般財団法人 3.11伝承ロード推進機構

今できることプロジェクトとは・・・

東日本大震災の翌年2012年より、震災の伝承や啓発、風化の防止を目指し取り組んでいるプロジェクトです。毎年、読者と賛同企業と河北新報社が一緒になって「何ができるか」を考えアクションしており、真の復興を果たすまで継続して取り組んでまいります。

秀光NEWS

市民の祈り、教訓後世に

岩沼復興の象徴「千年希望の丘」


秀光中の生徒が慰霊碑モニュメントの鐘を鳴らし、鎮魂の祈りをささげた

語り部・渡邉さん「避難の大切さを発信」

【3年菊地怜香・2年菅野美月・1年花田稟果】

「ここでは震災の悲しみだけでなく、これからのために、私たちが行っていることを伝えていきたい」

震災語り部を務める渡邉良子さん(79)は、「千年希望の丘」で私たちを案内しながら、表情を引き締めてこう話しました。

千年希望の丘は、震災の津波で人が住めなくなった土地を活用し、沿岸部の約10㌔にわたり六つの公園と14の丘や園路が整備された岩沼の復興の象徴です。「千年先に市民一人一人の思いや祈り、震災で得た多くの教訓を伝えたい」という願いを込めて名付けられました。

「公園を六つ造ったのは、震災前に集落が六つあったからです」と渡邉さん。公園には「相野釜」や「新浜」など集落の名前が付けられています。

相野釜エリアに設置された慰霊碑モニュメントの高さは、あの日押し寄せた津波と同じ8㍍。14の丘は高さ最大11㍍あり、震災時と同様の津波が襲来したときは避難できるよう設計されています。丘の土台には、がれきなどの震災廃棄物を利用しました。

園路の周囲には根が深く張る広葉樹が植樹されています。津波の威力を削減することが目的で、延べ4万3000人のボランティアが約37万本を植えたそうです。

岩沼では震災時、市域の48%に当たる2900㌶が浸水し、関連死を除く死者・行方不明者は181人に上りました。渡邉さんの義兄も亡くなった1人です。

震災直後、渡邉さんは「悲しくて悔しくて、涙も出なかった」と振り返ります。

語り部になったのは「危険を感じたときは逃げるべきだと伝えたかったから」と渡邉さん。「災害が起きたとき、一番大切なのは自分の命。周りの人を助けようと思って亡くなった警察官や市職員もいる。必ずしも周りの人を助けなくてもいい」と強調しました。

犠牲者の家族や友人など周りの人たちの深い悲しみを、当事者として知っているからこその言葉なのかもしれません。

「希望の丘」に込められた願いを、持続的に後世に伝えることの大切さを、この丘に来て学ぶことができました。

私たちは学校でSDGs(持続可能な開発目標)について学んでいます。「持続可能」というのは時代のキーワードになっていると思います。「災害発生時は避難行動を取る」という意識を持続的に抱き続けることが大切だと実感しました。

私たち秀光中学校の1~3年生10人は昨年10月2日、岩沼市などで取材を行いました。沿岸部の集落跡に造成された「千年希望の丘」では、震災語り部の渡邉良子さんらに案内してもらいながら話を聞きました。津波被害を受けた農地にほど近い内陸部に建設された「岩沼みんなの家」は、地元野菜の直売やランチ営業をする交流施設。運営法人代表理事の谷地沼富勝さんは「農地の復興が地域の復興につながる」と語っていました。仙台空港はあの日、約1700人が孤立しました。食料が乏しく、電気、上下水道ともに使えない状況下で赤ちゃんから高齢者までが過ごした経験を踏まえ、講じた対策について説明を受けました。

仙台空港 安全性高く

運営会社・木村さん 津波経験生かす


熱心にメモを取りながら、仙台空港運営会社の担当者に取材する秀光中の生徒たち

【3年鈴木新也・大場直路・京増瑠価、2年千葉ひなた】

岩沼市と名取市にまたがって位置する仙台空港。震災時は高さ3㍍を超える津波が押し寄せました。がれきや車両が津波とともに空港ターミナルビルの1階に流れ込んできて、非常電源が喪失。水がなくトイレも使えない状況で、2階以上に避難した約1700人が孤立しました。

当時、ターミナルビル3階にいた空港運営会社の木村昭仁さん(46)は「何が起きているのか理解できず、悲鳴が聞こえて足が震えました」と振り返ります。

空港周辺では火災も発生していました。割れた窓から冷気が吹き込んでくるので、段ボールや緩衝材にくるまって震えながら一夜を過ごしたそうです。

翌日はまだ水が引かず、救助のボートが来たのは午前10時ごろ。まずは高齢者らを退避させました。震災発生から3日目に水が引き、バスが来て全員がビルから助け出されました。

運営会社広報の高山東志江さん(46)は「震災経験を踏まえ、自然災害などに備える事業継続計画(BCP)を会社として策定しました」と教えてくれました。

空港は海近くに立地しているため、津波被害を最大のリスクと捉え①人命の安全確保②電力確保③滞留者への対応―が柱になっています。

多くの外国人が空港にいるという状況を想定し、緊急時は多言語でも地震発生を知らせます。避難先を知らせるマークを見やすい場所に掲示しています。

電力確保策として、電源室の扉を水圧に耐えられるようにして配線も変更。非常電源を水害から守るようにしました。

備蓄も充実させました。被災時、ビルにとどまらざるを得なくなった人たちのために毛布2000枚、食料、携帯トイレのほか、ベビーフードやおむつも用意しました。

高山さんは「救助が来るまで、ビル避難者の安全を確保する態勢を整えました。安全に、安心して利用してもらえる空港を目指しています」と話していました。

集い、岩沼に活気を

「みんなの家」運営・谷地沼さん

【3年国本鉄烈・市川奈那夏、1年渡辺沙羅】

住宅地の一角に位置する「岩沼みんなの家」。東日本大震災の被災地を活気づけたいという思いで、東京のIT関連企業が整備しました。建物は木造平屋の65平方㍍。地元やIT企業の人たちで組織する一般社団法人が運営し、ランチ営業や野菜の直売などを行っています。

「『みんな』という名前には、誰もが使える交流の場であってほしいという思いを込めています」。こう話すのは法人代表理事の谷地沼富勝さん(46)=建設会社経営=です。

震災当時、谷地沼さんが住む玉浦地区をはじめ岩沼市の沿岸部には、津波が襲来。田畑が広がる景色はあっという間にがれきで埋まってしまいました。

震災直後、物流が止まった被災地の多くは食料不足に直面しました。がれきだらけになった農地は耕作放棄地になり、将来的な食料供給に支障が出るかもしれない。

こんな不安を募らせていたとき、谷地沼さんは被災地の支援先を探していたIT企業の担当者と知り合い、「みんなの家」の整備を依頼しました。

「岩沼の沿岸部はもともと農業地帯だけど、若い人の農業離れが続いていました。地域の再生のため農家がもうかる仕組みをつくり、農業離れを食い止めたいと思った」と谷地沼さん。

地元の人たちが「みんなの家」に集まって地区の将来のことを語り合うとともに、農業支援の起点にしようと、月曜と水曜は地元の野菜を使ったランチを提供したり、土曜日は野菜やコメの産直市を開いたりしています。

地元の野菜やコメなどを使ったジェラートも人気商品。仙台市青葉区のジェラートショップに食材を持ち込み、開発してもらって2014年から販売しています。

農林水産省の調査によると、基幹的農業従事者に占める65歳以上の割合(全国)は、7割近くに上っています。谷地沼さんは「農業は一人ではできないです。だからこそ、多くの人に農業に触れてもらいたい」と話していました。震災の傷跡を癒やすためには、私たちの農業への関心が必要だと思います。


スライドを使いながら復興の歩みを説明する谷地沼さん(左)=岩沼みんなの家

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

発信の大切さを学んだ

市川 奈那夏　3年



今回私は、地元野菜の販売をしたり、ランチ営業をしたりする施設「岩沼みんなの家」を取材しました。施設の運営法人代表理事、谷地沼富勝さんは震災のときの避難所でのさまざまな経験を踏まえ、多くの人たちに災害について知ってほしいという思いで、私たちの取材を受けてくれました。震災後、被災地で支援先を探していたIT企業担当者に「将来について地域の人たちと話し合う場所がほしい」と申し出たそうです。谷地沼さんの話を聞いたとき、自分の思いを形にすることがすごいと思いました。つらい震災経験を発信することの大切さも学びました。

人と人のつながり大切

菅野 美月　2年



私は東日本大震災当時3歳で、ほとんど記憶はありません。そのため、震災が起きたとき何をするべきか学ぼうと思い、プロジェクトに参加しました。「岩沼みんなの家」の谷地沼富勝さんらが震災時、どのように行動したのかを取材しました。消防団員は行方不明者の捜索、水道業者はライフラインの修復など、各自ができることに取り組んだそうです。地域コミュニティーがあったからこそできたことで、人と人とのつながりの大切さを感じました。不安や怖さでいっぱいの中、行動するのは難しいと思います。震災に遭ったときは復興への一歩を踏み出せる人になりたいです。

安否確認の大切さ実感

京増 瑠価　3年



岩沼では沿岸部に大規模な植樹をしたり、高さ10㍍を超える丘を造成するなどして、津波の威力を緩和する取り組みを行っています。「みんなの家」は震災の出来事を多くの人々に伝え、これからどうするか考えるためにつくられました。そこで私は自分自身で何ができるのか考え、二次被害を避けることが大事だと実感しました。また災害が起こる前から家族などと安否確認ができるよう、連絡方法と待ち合わせ場所を決め、友人や同僚とも互いの安否を確認し合うようにしておくとよいと思いました。私は今回のインタビューを通じて、情報共有をすることが大事だと学びました。

奇跡の連続 犠牲者ゼロ

鈴木 新也　3年



岩沼市と名取市にまたがる沿岸部に位置する仙台空港は、東日本大震災の被害を大きく受けました。震災時、仙台空港は3㍍を超える津波に襲われ、1700人が空港ターミナルビルで孤立しました。空港にいた人が津波に巻き込まれて犠牲になることはありませんでしたが、空港にとどまった人たちの命をどうやって守るかが課題であることに気付いたそうです。停電で暖房は効かず、上下水道は利用できません。空港の周りは浸水していて、救助のボートが来たのは翌日でした。「犠牲者が出なかったのは、小さな奇跡の積み重ねだ」と空港の担当者は話していました。

自分自身を一番大事に

花田 稟果　1年



今回の取材を通して、読者の皆さんに伝えたいことは、「自分自身を一番大事にすること」です。語り部の渡邉良子さんの話を聞き、震災では人を助けて自分の命を失ってしまった方がいることを学びました。だからこそ自分自身の命を一番大切にしなければならないと考えることができました。皆さんも一度、被災地に足を運んでみてください。震災の悲惨さや、復興について何か感じると思います。震災では、生きたくても生きられなかった方々が大勢います。私は希望を忘れず、幸せに暮らせていることに感謝しながら、日々を大切に過ごしていきたいです。

災害のすさまじさ実感

大場 直路　3年



私が今回、被災地に行って学んだことは地震と津波の威力です。建物は流されてしまっていて、マンホールも地面の液状化現象などで浮き出ていました。テレビなどの映像でしか見ていなかった自然災害のすさまじさを実感できました。震災に対する考え方も変化しました。「まずは自分の命を守ろう」と思いました。日頃の備えも大切だと思いました。仙台空港で取材した時に対策を聞いたところ、震災時に足りなかった毛布やおむつ、食料や水などの備蓄を強化したと話していました。地震が起きたときのことを想定し、自分でも備えをしようと思いました。

被災地応援 気持ち大事

菊地 怜香　3年



私はこのプロジェクトを通じて、たくさんの人たちの協力がなければ復興はできないことを知りました。「千年希望の丘」の植樹活動に参加したボランティアは4万3000人に上るそうです。私はボランティア活動をあまりしたことがないのですが、今回学んだことを生かし、人の役に立てるようボランティア活動を積極的に行いたいと思いました。ボランティアはできなくても、震災のことを知って応援したいという気持ちがあるだけでも十分復興につながると思います。機会があったら「希望の丘」に行き、震災のことをもっと詳しく知ってほしいです。

震災記憶し教訓伝える

国本 鉄烈　3年



私は、今回の「今できることプロジェクト」を通して、震災を風化させないことの大切さを知りました。このプロジェクトに参加する以前は、震災のことを忘れていました。しかし、「千年希望の丘」などの震災の傷跡が残っている場所に行くと、まだまだ震災のつらい思いは残っていることが分かりました。けれども、それだけではなく、復興のために頑張っている人たちがいることも分かりました。その懸命な姿を見て「私に何ができるのだろう」と自問した結果、「震災を記憶に残すことだ」と気付きました。記憶に残すことによって、震災からの教訓も生かせるのだと思いました。

訓練忘れず身守りたい

千葉 ひなた　2年



東日本大震災を体験し、復興のために頑張っている人たちの話を聞き、自然の威力のすごさや防災訓練の重要性を感じました。「千年希望の丘」では自然の力で津波の威力を弱めようと植樹が行われています。また、「岩沼みんなの家」では近所の人たちとのつながりの大切さや防災訓練が自分の身を守るため、いかに大事かを考えさせられました。訓練は訓練でしかありませんが、実際に災害が起きたとき自分の命を守るためとても重要だと思います。仙台空港では自分のやれることを無理せずやるということを学びました。自分にやれることはいろいろあると思いました。

地域の支え 復興の力に

渡辺 沙羅　1年



「岩沼みんなの家」運営法人代表理事の谷地沼富勝さんは、岩沼に活気が戻るよう「みんなの家」をつくったと話していました。震災直後は一人一人が、自分にできることをやっていたそうです。地域の協力や支えで復興できたのだと思います。この新聞を多くの人に読んでもらい、東日本大震災を経験してない人にも教訓を伝えていきたいです。今回のプロジェクトに参加して、被災地が復興に近づいていることが分かりました。地震はいつ起きるか分からないので、私たちにも人ごとではありません。いつ起きていいように日頃から備えていくべきだと改めて思いました。

1000年後の命を守りたい

宮城・女川 震災教訓刻んだ「いのちの石碑」

実行委・鈴木さん「1000万円 募金集め建立」

【2年佐藤ひかり・鳥飼日和・藤枝慎之輔】

「1000年後の命を守っていくための活動です」

旧女川中の敷地内に建てられた「いのちの石碑」を前に鈴木智博さん(22)は実行委の取り組みを語りました。震災当時は小学6年生。直後に入学した女川中の同級生らとともに、2012年秋ごろから津波の脅威を伝える石碑を建設しようと活動を始めました。

提示された1000万円の建設費用は、修学旅行先の東京など、各地で100円募金を呼び掛け、約半年かけて集めました。13年11月、1基目が完成。女川町内の全21行政区に、順次石碑が設置されました。石碑には、「もし、大きな地震が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください。逃げない人がいても、無理やりにでも連れ出してください」という言葉を入れました。

さらに、女川中の生徒が考えた俳句も添えられています。「夢だけは壊せなかった大震災」「ただいまと聞きたい声が聞こえない」など全21基にそれぞれ句が彫ってあります。どれも震災を経験して感じた率直な気持ちが込められています。

実行委では、震災の記憶を後世に伝えるための「命の教科書」の制作など、さまざまな活動にも取り組んでいます。

長い間、海と共に暮らしてきた女川の人々にとって、海はなくてはならない存在。津波が街を襲っても、再び海の見える街をつくろうと決断しました。鈴木さんたちの活動は、これから増えていく震災を知らない世代に、自分の命を自分で守る大切さを伝える役割も担っているのです。

最後の1基は21年11月23日に完成しましたが、「1000年先の命も守る」という思いを持つ鈴木さんたちにとっては、たった1%を過ぎただけ。鈴木さんは、「大きな津波が来たとしても、被害を受ける人を一人でも少なくしたい。そして、残りの990年、みんなで命を守っていきたい」と強く語りました。

今回、鈴木さんにお話を聞いて、いのちの石碑の存在をもっとたくさんの人に知ってもらい、命を守るために何ができるかを考えていきたいと思いました。



旧女川中の石碑を前にプロジェクトについて説明する鈴木さん。学校は移転し旧校舎はひっそりと静まりかえっている



生徒たちは震災遺構「旧女川交番」も見学、街を襲った津波の威力を知った

シーパルピア女川運営団体代表・阿部さん

面白い人 集まる街に

【2年佐藤叶那・柳沼和奏・渡邊みいな】

JR女川駅前に整備された商店街「シーパルピア女川」。美しい海をコンセプトに、レンガ道に店舗が並んでいます。この商店街は海を見ながら集い、にぎわうことができる町の拠点となっています。

シーパルピアを運営する女川みらい創造代表の阿部喜英さん(53)は、女川を「面白い人が集まる街にしたい」と話します。

女川町は東日本大震災で甚大な被害を受けました。宮城県内で最も高い14・8メートルの津波が襲い、死者・行方不明者は827人にのぼりました。

新聞販売店を営む阿部さんは人口が少なくなっていく女川で、どうしたら商売を続けられるか頭を悩ませました。町を出ることを考えたこともありましたが、子どもたちが「残りたい」と言ったことが原動力となり、人が戻ってくる街をつくろうと決意しました。

まちの再生にも積極的に携わりました。女川町は行政と地域住民が一体となり、震災後のまちづくりを構想。町全体をかさ上げし、海に近いエリアで商売を、住宅地は山を切り開いて高台に集約しました。商店の核となったのが2015年12月に完成した「シーパルピア女川」です。各店舗をテナントとして貸し出しているのが特徴で、変化しやすい仕組みをつくりました。現在のテナントは震災前から女川で商売をしていた人よりも、震災後新たに女川に来た人の方が多くなっているそうです。

「建物が建つことだけが復興ではない。これから女川を魅力ある街に発展させていくことが大切」と阿部さんは今後の展望を語ります。女川ファンを増やし、女川に行きたい、女川の人たちと関わりたい、そういう人を増やす取り組みをこれからも続けていきます。

阿部さんのお話を聞いて印象的だったのは、「若い世代にアドバイスはない」と話していたことです。今は個人のチャレンジが形になっていく時代。上の世代の話を聞くだけでなく、自ら考え、疑問を持つことが大切だ、と教えてくれました。これから社会に出ていく私たちがバトンを受け取り、自分のやりたいことに挑戦しようと思いました。そして、女川町がたくさんの人の印象に残る街になり、これからも発展していってほしいと感じました。



震災後、官民一体で迅速に進められた女川町の街づくりについて説明する阿部さん



小売店や飲食店が入居する「シーパルピア女川」などが、にぎわいを創出する

スペインタイルに情熱

セラミカ工房・阿部さん「街彩りたい」

【2年天野友里恵・伊勢智大・笠原梨那】

女川で生まれ育った阿部鳴美さん(61)は、町内の商店街シーパルピアにある「みなとまちセラミカ工房」でスペインタイルの制作に励んでいます。スペインタイルとの出合いは、東日本大震災がきっかけでした。

震災前は陶芸サークルで仲間たちと充実した日々を送っていた阿部さん。2011年3月11日、状況は一変しました。自宅は流され、サークル仲間の一人を亡くしました。「色を失った町全てが壊滅状態で、どこに目を向けていいか分からなかった」と阿部さんは当時を振り返ります。

震災から半年、ようやく生活が落ち着いてきました。サークル仲間と再会し、陶芸をまたやりたいという気持ちが芽生えました。縁あって窯を寄付してもらい、町内のイベントで陶芸のワークショップを開くなど、活動を再開。その後、民間でまちづくりをする団体から「スペインのガリシア地方と異文化交流をしないか」、という提案を受けました。これがスペインタイルとの出合い。古くからスペインの文化として根付くタイルを勉強し、新しいタイルの勉強に励みました。そしてスペインを訪れるチャンスが巡ってきました。出発日は2012年3月11日。この日に女川を離れていいのかと悩みましたが、友人の勧めもあり、スペイン行きを決意しました。

色鮮やかなタイルであふれていたスペインの街並み。青は女川の空と海を、黄色は希望を表しているようだと、阿部さんは感じました。スペインで見た色鮮やかな光景は、女川の明るい未来とシンクロしているようでした。阿部さんは「決して色あせないタイルで女川を彩り、1000年先の未来まで残したい」と強く決意。阿部さんは、女川のシーパルピアをスペインタイルで鮮やかに彩りたいと明るく語ります。

私たちは阿部さんに取材をし、もっと多くの人に女川を訪れ、色とりどりの町を楽しんでほしいと思いました。



スペインタイル制作に取り組むきっかけとなった出来事を語る阿部さん



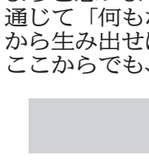
タイル制作を体験する尚絅学院中の生徒たち。この時のタイルは今秋、女川町に飾られる予定だ

私たち、尚絅学院中学校の2年生9人は、昨年10月23日に宮城県女川町で取材活動を行いました。旧女川交番の前で「いのちの石碑プロジェクト」の鈴木智博さんに被災状況を伺ったあと、旧女川中へ移動しインタビューを行いました。まちなか交流館では、「みなとまちセラミカ工房」代表の阿部鳴美さんにスペインタイル制作を始めたきっかけや現在の活動についてのエピソードを聞き、タイル彩色体験にも挑戦しました。「女川みらい創造」代表取締役社長の阿部喜英さんには、官民一体となって進められた被災後の街づくりの道のりについて説明を受けました。

尚絅新聞

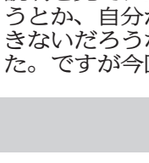
聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

不安な気持ち今も心に　天野 友里恵　2年



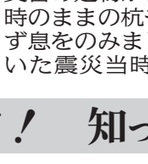
震災当時は3歳でしたが、地震の揺れの衝撃や不安な気持ちを今でもはっきりと覚えています。その後、大きく揺れるものを見ると恐怖を感じてしまうようになりました。震災で辛い思いをし、今も心に傷を抱えている人が少なからずいると思います。でも、今回の取材を通して、女川の方々が復興に向けてさまざまな活動をしていることを知りました。明るい未来を築いていこうとする姿に、元気をもらえた気がします。震災からまもなく11年。震災を知らない子どもたちが増えています。その子たちが大切なものや命を失うことの無いよう、震災の教訓を伝えていきたいです。

伝承への強い思い実感　佐藤 叶那　2年



私は、今回「今できることプロジェクト」に参加して、色々なことを学びました。震災遺構として残る旧女川交番では、杭がむき出しになっている様子を目の当たりにしました。映像などではなく、実際に見て初めて被害の大きさを実感できました。また、津波の脅威を後世に伝えるために建てられた「いのちの石碑」を見に行きました。震災当時、私と同世代だった中学生たちが1000万円もの資金を募金で集めたという話を聞いて、その行動力に驚きました。自分や他者の命を守ろうとする「行動力」は、これから1000年後の未来に伝えていくべきことだと思いました。

被災者の思い伝わった　藤枝 慎之輔　2年



私は、東日本大震災の時は2歳でした。地震が起きたときはお昼寝中で、何も覚えていません。ですが、家族と震災遺構の大川小学校を訪れたり、防潮堤を見に行ったりするなど、震災について学ぶ機会はありました。今回の視察で女川の方々からお話を聞き、震災の怖さや復興への思いを改めて知りました。家族で被災地を訪れた際は分からなかった、被災者の思いや復興の経緯を知ることができたと思います。後日また女川を訪れましたが、視察前後で女川の街を見る目が変わったような気がします。視察を通して、震災の経験をこれから伝えていきたいと思いました。

津波の破壊力まざまざ　伊勢 智大　2年



女川については被災地、ということぐらいしか知りませんでした。初めはきれいな街並みやお話を聞いた方たちの生き生きとした表情が印象的で、本当に津波がこの街を襲ったのか信じられませんでした。でも、当時のままの真横に容赦なく倒された旧女川交番を見て、やっと津波の破壊力を理解できました。当時はまだ3歳。今まで震災の話を聞いても、「みんな大げさに話しているのだろう」と思い込んでいました。未来の命を守るために、東日本大震災を教訓としてほしいです。震災を知らないたくさんの人に、震災遺構を見て、津波の恐ろしさを感じてもらいたいです。

前向く人々の姿 印象的　佐藤 ひかり　2年



私は、女川の方たちが、被災して大変な状況でも、町のことを考えて前向きに行動していたことが印象に残りました。1000年先の人の命を守るために建てたいのちの石碑や、街を明るく彩るためのスペインタイル、海の見える街をつくり上げたことなど、女川で暮らす人々を思って生みだされたものがたくさんあります。この紙面を通じて、一人でも多くの人に震災で起こったことを伝えていきたいです。そして、今ある命を大切にして，もしまた災害が起きても、今回の震災の経験やお話を聞いたことが生かせるよう、さらに学びを深めていきたいです。

行動することこそ大切　柳沼 和奏　2年



私はいのちの石碑実行委員会の活動を聞いて、行動することの大切さを感じました。実行委の鈴木智博さんは震災当時、自分とほぼ同じ年でした。未来の命を守るため、同級生たちと女川町の全21行政区に石碑を建てようと立ち上がりました。建設費用1000万円は修学旅行先でも募金活動を続け、集めたそうです。自分が鈴木さんの立場だったら、震災が起きた現実を受け止められず、誰かのために行動することなどできなかったと思います。未来の命を守るために行動した鈴木さんたちの活動やいのちの石碑について、多くの人に伝えていくべきだと思いました。

諦めず歩む女川に感動　笠原 梨那　2年



女川取材で印象的だったのは、女川の人たちの前向きな気持ちです。私が大切なものを失ってしまったら、絶望してしまうと思います。しかし、取材を通じて「何もなくなってしまったから生み出せばいい。作ればいい。ここからでも、前を向けばいい」という想いに触れることができました。また、町の皆さんは「大きな家族」のような存在だと言っていました。震災後、住民と行政が一体でまちづくりを進めたことからも、女川の人たちの前を向く姿勢や一体感を感じました。復興に向かって諦めずに歩んできた女川の皆さんの思いを、多くの人に感じてもらいたいです。

自分ができること模索　鳥飼 日和　2年



私はドライブ好きの父に連れられて、女川をはじめ被災地を何度か訪れたことがあります。被災した建物や被害状況の説明を見て、家の再建は大変だろうとか、自分が被災したら何もできないだろうな、と思っていました。ですが今回取材した方々の話を聞くと、一人一人が女川のためにできることは何かを考え、行動していたことが分かり、その行動力に心を打たれました。いつまた大きな地震が来るかは分かりません。もし被災しても、お話を聞いた女川の皆さんのように、自分ができることを探して、復興に向かって行動できるような人になりたいと思いました。

息のむ旧女川交番の姿　渡邊 みいな　2年



女川を訪れた第一印象は「きれいな町」でした。どのお店を見ても震災の被害などなかったようでした。ですが、旧女川交番の建物が横倒しになった、当時のままの杭や割れた窓に、思わず息をのみました。東京に住んでいた震災当時の記憶は曖昧ですが、宮城の沿岸部に住む祖父母が心配だったことは覚えています。祖父母は避難先の高台から津波が街を襲う様子を見て、とても悲しんでいたそうです。新しくてきれいに見える女川の街も、祖父母のようにつらい思いをした人たちが立ち上がってできた歴史があります。視察を通じて被災地の復興の歩みを知ることができました。

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

宮城野中新聞

防災の知恵 遺構から学ぶ

宮城・山元 中浜小 津波の脅威伝える


児童、教職員ら90人が避難し、寒さと余震が続く中で互いに励ましあいながら一夜を明かした中浜小の屋根裏部屋

元校長・井上さん「備え 未来の命のため」

【2年薄井虹汰・佐藤昇真・橋本敬永】

全てが流された空き地に、オレンジ色の瓦屋根が特徴の山元町震災遺構中浜小学校がぽつんと立っています。校舎1階の一部は窓が全てなくなり、建物越しに反対側の景色を見通すことができます。太い柱には鉄骨が巻き付き、津波の威力が垣間見えます。

「震災遺構には防災のさまざまなヒントがあります」。被災した校舎の状況を説明しながら、当時の校長で語り部の井上剛さん(64)は説明します。「遺構は災害の大きさだけではなく、未来の災害に備えるための知識を得る場所です」

地震発生後、中浜小には教員と児童に周辺住民を加えた90人が避難しました。井上さんの指示で職員室のテレビをつけると、「10分後に6㍍の津波がくる」との情報が流れ、やがて10㍍に修正されました。

最寄りの小高い山までは約1・2㌔あり、児童の足で徒歩20分ほど。井上さんは2階建ての校舎は高さ8㍍でも、建設当時に土地を2㍍かさ上げしていることを知っていたため、屋上ならしのげると判断しました。2階の資料室から屋上に続く狭い階段を使い、全員が上りきるまでにかかった時間は5分ほどでした。


震災当時のことを語る井上さん

命を左右する選択をした井上さんは、最後に階段を上りました。「生きて下りる」と心に強く誓いながらも、自分が下した決断に「重圧と責任が一気にのしかかってきました」と、当時の気持ちを打ち明けます。

結局、津波の襲来は約1時間後。命は助かったものの、校舎内には飲み水も食料もありません。一番の問題は、夜の寒さをしのぐ方法でした。

気象庁のデータでは、当日の午後6時以降の気温は氷点下2度を下回っていました。屋上は一部が屋根のある倉庫のようになっており、浸水を免れましたが、暖房はありません。床はコンクリートで、横たわるのは難しい環境でした。

教頭先生が体育館に非常用毛布があることを思い出し、職員と地域住民が小さな懐中電灯を頼りに探し出しました。寒さと空腹に耐え、不安と恐怖が入り混じった表情の児童と避難者。井上さんは「頑張ろう。あったかい朝日は必ず昇るから」と言葉を掛けました。「恐怖を少しでも和らげ、希望を与えるためだった」と説明します。

翌日、自衛隊のヘリコプターで全員が無事に救助されました。

自然災害はいつ起きるのか分かりません。知識や情報とともに、判断力や行動力を身に付け、最善の選択ができるように普段から心掛けることが重要です。「備えることは未来の命を守ること」。井上さんの言葉を忘れません。

「近助」の力 命つなぐ

旧山下中に避難、住民団結

【2年伊東柊真・今野雄弥・高橋恵蓮】

「炊き出しが始まればわれ先にと混雑するじゃないですか。でもそんなことは一度もなかったんです」

海岸線から4㌔ほど離れた旧山下中学校（現山元中学校）は生徒や教員、周辺住民に加えて、福島県からも約750人が集まる避難所となりました。

住民と一緒に避難所を運営した当時の校長、渡辺修次さん(70)は「食事の量は最初の人も最後の人も全く同じ。住民同士が手を取り合いながら生活を送りました」と振り返ります。

情報や物資が不足する中、避難者たちは自主的に役割分担や生活ルールを決めて避難所運営に当たり、ほとんど不平不満が出ることはありませんでした。

家事が得意な人は食事作りや配食を担当。避難所警備係や連絡係、役場との折衝などを分担し、体育教師が毎朝、運動不足解消のためラジオ体操を実施しました。外部からのボランティアがいなくても、住民同士がしっかりと団結して大変な状況を乗り越えたのです。

渡辺さんは、自分の身を守る「自助」、助け合う「共助」に加えて、日ごろから身近な人たちと交流して協力する関係をつくる「近助（きんじょ）」の大切さを説きます。「この地域には『近助』が震災前から当たり前のようにあったのです」

あの日から間もなく11回目の3月11日を迎えます。町内の道路も建物も改修や新たな造成が進み、きれいな姿に変わっています。渡辺さんは「やまもと語りべの会」の会長として語り続けることの大切さを説きます。

「卒業証書を受け取ったわずか4時間後、自宅で祖父を救おうとした一人の女子生徒が津波に飲まれました」。校舎わきにある「命の碑」には亡くなった生徒の名前が刻まれています。

渡辺さんは石碑を見つめながら、「揺れた後には津波の危険性があることを大人がしっかりと伝えていれば、防げる命はもっとあったはず」と言葉を繋ぎます。

「震災を思い出して話すのはつらい。でも、若い命が奪われるようなことを二度と繰り返したくない」

被災者の心の傷はまだ完全には癒えていないと渡辺さんは指摘します。「今後は心の復興を進めていきます」と決意を新たにしていました。

山元中3年、佐藤禅介さん(15)は震災の教訓を発信しようと、12歳の時に防災士の資格を取得。「日ごろから備えていれば、みんなが周りを助ける側に立つことができる」と教えてくれました。

日常や命が突然奪われた被災地の現実を見聞きして、学んだことをさらに次の世代につなぐことが大切だと感じます。記憶のバトンを未来に託す。できることを一つずつ実践していきたいと思います。


旧山下中で災害への備えの大切さを訴える山元中3年の佐藤さん(右)と、震災当時校長だった渡辺さん

「磯浜のホッキ待ってる」

消費者の声 漁再開の力に

【2年赤田佳優・安藤凛子・澤野花音】

宮城県山元町の沿岸南部にあり、福島との県境に近い磯浜漁港。幾度も押し寄せた帯状の巨大な波が、停泊していた40隻の船を流し去りました。その様子を宮城県漁業協同組合仙南支所（山元）運営委員長の岩佐敏さん(62)は丘の上から眺めていました。

山元町はホッキガイ漁が盛んな地域です。海底の貝を取る漁業再開に向けて、大きな壁となったのは、津波で4000カ所に散らばった消波ブロックでした。

大部分の撤去に3～4年かかり、いまだに残ったままの場所もあります。漁師の高齢化が進んでいたことや後継者の不在、船の購入に4500万円以上かかるという費用面の問題もあって、引退したり、再開をあきらめたりした人もいました。

「また山元で取れたホッキガイが食べたい」。漁業継続の難しさを感じていたころ、漁協に消費者の声が届き始めました。「漁の再開を待っていてくれる人がいる」。励ましの言葉が岩佐さんたちの背中を押しました。若い漁師や消費者のためにも漁業を未来につなごうと、先進地を参考に「マンガ」と呼ばれる漁具を最新式に更新しました。熊手のように海底を掘り起こす鉄製の旧式から、ノズルで噴出する水圧で貝を掘り上げてかごに流し入れるステンレス製に変更。値段は15倍ですが、「将来への投資」（岩佐さん）と、国や町の助成を受け準備を進めました。仲間も続きました。

乱獲を防ぐためのルールもつくりました。水揚げする貝の大きさを5年程度成育した「9・5㌢以上」と規定。1日の漁獲量を出漁した船の数で等分します。

磯浜のホッキガイ漁再開は、地域や消費者の思いに応えようという漁師の熱い思いがこもっています。岩佐さんは「山元産は肉厚で、さっと熱湯にくぐらせて刺身で食べるのがお勧め」と教えてくれました。ホッキガイをたくさん食べて、漁業を未来につなぐ応援をしたいと思います。


海中の震災がれきの影響で困難になったホッキガイ漁を再開するために導入された漁具「噴流式マンガ」(手前)

聞いて！ 知って！ 同世代へのメッセージ

生活を変える「学び」　赤田 佳優　2年



旧山下中学校では自分の命を守る「自助」や助けることができる者たちが協力し合う「共助」を学び、震災遺構中浜小学校では刻々と変化する状況に対応するため、知識と情報収集を掛け合わせて判断し、行動することの大切さを教わりました。磯浜漁港では名産のホッキガイと地域の漁業を守るため逆境に負けずに前に進んできた話を聞きました。私は今回のプロジェクトを終え、災害から身を守る防災や、被害を最小限に抑える減災への取り組み方が変わって、より熱心に取り組んでいくことができると思います。これからも積極的に復興に関わる方法を考え、行動したいです。

助け合いの精神を意識　薄井 虹汰　2年



プロジェクトに参加して、二つの事を学びました。一つ目は、災害が発生したら一人ではなくまとまって行動することが大事ということです。避難所となった旧山下中学校や震災遺構中浜小学校では、避難した人々が協力していたことが印象的でした。緊急時にもみんなで話し合い、交流することで不安は和らぎます。二つ目は、災害はいつ起きてもおかしくないということ。発生を予測することは困難です。いつ起きてもいいように防災マップや家具の転倒防止対策、ハザードマップの把握といった備えが大切です。普段からの心掛けが「減災」につながると信じて生活を見直します。

知識蓄え 伝え 実践する　澤野 花音　2年



10年以上も前の東日本大震災は体験したことではあっても、記憶の薄い漠然としたものでした。今回のプロジェクトを通じて、災害発生時にどのように行動すればいいのか、という新たな指針ができました。近所付き合いを良くすれば有事に協力関係を築きやすいと知りました。過去の災害を記した石碑や高齢者の話に耳を傾ければ、避難する際の道しるべになります。どれも今から取り組めることばかりです。過去の災害から得た教訓を今後生きていく社会にどれだけ落としこむことができるかが大切です。今から知識を蓄え、伝え、実践していくべきだと思いました。

過去の教訓 今に生かす　安藤 凛子　2年



取材を通じて学び、伝えたいのは、「得た教訓を自分事として生かし、命を守る行動につなげる」ということです。渡辺修次さんは「震災を語ることはつらい。でも、伝え続けることで守られる命がある。多くの若い命が失われるようなことは繰り返したくない」と話しました。その言葉に私はハッとさせられました。過去の災害を、数学や理科を勉強するような感覚で学んでいたことに気づかされたからです。大災害は5分後にも起きる可能性があります。震災を今に生きる行動の指針として命を守る行動につなげることが私たちに求められていると感じました。

学びをつなぎ自ら発信　今野 雄弥　2年



当時2～3歳だった私たちの記憶は薄く、覚えていることは少ないです。被災地を訪問して聞いた話のほとんどが初めてで、想像を超えたつらいものでした。旧山下中学校では、近所付き合いが多い地域だったため、避難所暮らしに大きな混乱はなく自然と役割分担が決まったことを知りました。日常の人付き合いが災害時は共助に結び付く。震災遺構中浜小学校では、発生直後の判断の重要性を、ホッキガイ漁が盛んな磯浜漁港では、漁業復活の取り組みについて学びました。学んだことを防災や人生に役立てていき、多くの人に知ってもらえるように努力していきます。

学び 受け継ぐのが使命　髙橋 恵蓮　2年



山元町を訪れ、震災10年という節目を再度考えるようになりました。過去にも震災を学んできましたが、それは全て書面や話で見聞きしたことです。実際に訪ねてみて、「3月11日」に何が起こったのか、復興のためにどれだけの努力が積み重ねられてきたのかを学ぶ事ができました。渡辺修次さんからは身近な人たちの大切さ、井上剛さんからは自分を信じる心を、岩佐敏さんからは苦難を乗りこえる努力を教えていただきました。直接聞かなければ分からない事でした。教えてもらった私たちが記憶を次の世代に引き継ぐことが最大の復興であり、未来への希望ではないでしょうか。

被害を減らす努力大切　伊東 柊真　2年



プロジェクトで学んだのは、震災の被害は甚大で、発生直後の被災者は本当につらい状況だったということです。小学生の頃からテレビのニュースなどで見聞きして知っていたつもりでしたが、実際に足を運んで、人々に直接インタビューする機会を得たことで、想像を超えた「大変さ」を実感することができました。災害は大切な人の命を突然奪い去ります。つらい思いをする人が増えないよう、さまざまな立場の人が、経験を伝える努力していることも分かりました。人は自然の前では無力です。それでも被害を減らす努力はできます。取材で得た経験を伝えていきます。

復興への想い伝えたい　佐藤 昇真　2年



取材で感じたのは、被害を受けても前を向き、復興に歩む人々の強さでした。津波は大切な人、思い出の詰まった場所や物など多くを奪いました。発生から10年。どれだけ辛い思いを抱えてきたのかは計り知ることができません。取材を受けてくれた方々は自らの苦しい体験を披露し「ほかの人に同じ思いをしてほしくない」と語りました。被災地には今もなお、悲しみに沈んでいる人がいるのです。かつての美しい町並みといった物理的な復興だけでなく、被災者の心も復興してほしい。時間はかかるかもしれませんが、みんなの笑顔が戻るよう、僕たちも応援していくつもりです。

聞いて！ 知って！ 同世代へのメッセージ